

大学生の自己愛類型と対人葛藤方略の関連性について

根岸 優稀¹⁾・山口 一²⁾

¹⁾ 特定非営利活動法人アントワープカウンセリングオフィス

²⁾ 桜美林大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

The Relationship between Narcissistic Type and Interpersonal Conflict Strategies of Undergraduates

Yuki NEGISHI¹⁾, Hajime YAMAGUCHI²⁾

¹⁾ Nonprofit Organization Antwerp Counseling Office

²⁾ J.F.Oberlin University Graduate School of psychology Department of Clinical Psychology

キーワード：青年期，自己愛，対人葛藤方略

抄録：青年期は自己愛傾向が強まり，その傾向から対人関係の結び方や適応度が異なることが先行研究から言われている。また，対人関係を考える際には，葛藤場面においてどのような方略を選択するかによって，適応度が異なることも考えられる。そこで，本研究では，青年期にある 18 歳から 25 歳までの男女大学生を対象に，自己愛類型と対人葛藤方略との関係を検討することとした。

750 名に質問紙を配布し，420 名分を回収した（回収率 56.0%）。回収されたものから欠損値等のあるものを除き 295 名の質問紙を分析対象とした（有効回答率 70.2%）。調査に用いた質問紙は，①フェイスシート（年齢，学年，性別），②自己愛人格目録短縮版（以下 NPI-S：小塩，1998）と自己愛的脆弱性尺度短縮版（以下 NVS 短縮版：上地・宮下，2009）を混合した尺度，③公的場面と私的場面を設定し回答してもらった対人葛藤方略スタイル尺度（以下 HICI：加藤，2003）である。

NPI-S と NVS 短縮版の混合尺度を因子分析にかけた結果，「過敏型自己愛 ($\alpha = .92$)」と「誇大型自己愛 ($\alpha = .91$)」の 2 因子構造が妥当であると判断された。なお，2 因子間の相関は低かった ($r = .17$)。HICI の因子分析を行った結果では，公私両場面共に，「統合・相互妥協」「強制」「回避」「自己譲歩」の 4 因子構造が妥当であると考えられた。男女別に自己愛の 2 類型と対人葛藤方略尺度の 4 因子の相関を検討したところ，男女とも誇大型自己愛は，公私両場面で「強制」と有意な正の相関がみられ，さらに女性の公的場面を除いて「統合・相互妥協」

とも有意な正の相関が見られた。過敏型自己愛は、男性の場合は「強制」、「回避」、「自己譲歩」と正の相関があり、公的場面においては、さらに「統合・相互妥協」とも正の相関が見られた。女性の場合は公私両場面で「統合・相互妥協」と正の相関が見られた。

以上の結果から、自己愛について、自己愛を過敏型自己愛と誇大型自己愛に二分して考えた Gabbard ら従来の研究の結果と合致していたが、2 因子間の相関が低く、本研究では 2 次元モデルを支持したといえる。自己愛のスタイルと葛藤方略との関係については、先行研究からは誇大型自己愛が強い人は適応的な方略を取り、過敏型自己愛が強い人は不適応的な方略をとりやすいと考えられた。しかし、誇大型自己愛が強い人は統合・相互妥協スタイルに加えてストレス反応や孤独感が高いといわれる強制スタイルを用いやすく、精神的健康の面において注意が必要であると考えられた。一方、過敏型自己愛が強い人は、男女で用いるスタイルがかなり異なっていた。男性の場合は公的場面では統合・総合スタイルとも相関が見られているが、どちらの葛藤場面においても非適応的なスタイルを用いる傾向があり、先行研究の対人関係が希薄で回避的であるという特徴が示唆されたと考えられる。一方、女性の場合は場面による葛藤方略に違いはなく統合・相互妥協スタイルを用いる傾向があり、葛藤方略スタイルにおいては不適応的であるとは言えないと考えられた。

臨床場面への応用としては、男女とも誇大型自己愛が強い場合には、自分の意見も相手の意見も取り入れてまとめられるような統合・相互妥協スタイルを選択できるように支援することで、葛藤状況を和らげることができるのではないかと考えられた。過敏型自己愛が強い男性は、強制、回避、自己譲歩という不適応的な対人葛藤方略スタイルをとりやすいため、アサーショントレーニングなどを行いアサーティブな表現が出来るように訓練等の介入を行うことで、より適応的な関係を維持していくことが出来るのではないかと考えられた。

第1章 序論

1.1 自己愛について

自己愛（ナルシズム）とは、イギリスの性心理学者 Ellis,H が 1898 年に自己の身体を対象とする性倒錯について論じた際にナルキッソスの物語を引用したことが発端となり、Nacke,P. により用いられ始めた言葉である（上地・宮下，2004）。このように最初は性倒錯を意味する言葉として用いられてきた自己愛であるが、その後、Freud,S. が精神分析の中に取り入れて以降、多くの研究者のより拡張・再解釈され、定義・理論ともに多義的な状態となっている（小塩・川崎，2011）。

その議論の進展の中で、自己愛の代表的な類型として、Kernberg の提唱する誇大型自己愛と Kohut が提唱する過敏型自己愛との 2 種類があると考えられるようになった（Gabbard, 1997）。

Kernberg が提唱する自己愛とは、他者の感情や反応に鈍感で周囲を気につけない誇大型の自己愛である。この自己愛のタイプは、DSM の自己愛性パーソナリティ障害に挙げられるようなタイプであると考えられる。このような自己愛が強い人は、日本で一般的に「ナルシスト」と言われてイメージするような、「自分は特別」というような特権者意識が強く、自己顕示的

な振る舞いが特徴的であるとされている。また、周囲の人の評価に動じることが無いことも挙げられる。このような特徴は、子どもの頃に一度は持つものであり、時期によっては子どもの成長を促進し、自己評価を高める働きを担う。上地・宮下（2004）はこのタイプの問題点として、以下の2点を挙げている。第1点目は、空想と将来像が区別できず、空想に浸ってしまうことで社会的孤立が深まり、毅然とした態度をいっそう硬化させることになること、第2点目は、能力に恵まれている人の場合に、誇大空想と現実との境目を見失いやすくなるということである。しかし逆に、誇大的な空想が強い達成動機として働くことも考えられる。その場合、能力を発揮し物事を達成することにより本人が満足感を得ることができ、物事を達成したために周囲からも尊敬され、さらに自己愛が高まることも考えられる。

次に、Kohut が提唱する自己愛は、他者の言動や反応に敏感で批判や軽視に傷つきやすく、過敏型と言われるタイプである。上地・宮下（2004）は過敏型の具体的な臨床像として、自分に自信がない、恥ずかしがり屋、引っ込み思案、人目を気にする、他者が自分のことをどのように評価しているかが気になる、他者からの批判に敏感で傷つきやすい、気分が落ち込みやすいといった特徴をあげている。

そして、Gabbard（1997）は上述した Kernberg が提唱する誇大型自己愛と、Kohut が提唱する過敏型自己愛の2種類の自己愛は相容れないものではなく、連続体上の両極端のタイプであり、自己愛はその混合した状態として表されるとした。

以上、自己愛の表れ方には様々なバリエーションがあり、その程度も様々であると考えられる。さらに、人は誰でも自分を愛する気持ちを持っているが、どこからが病理につながる自己愛で、どこまでが健全な自己愛であるかの判断は難しい。一方で、対人関係において、自己愛が独特なスタイルとして表れるために支障をきたしていると判断されることも多い。不適応をきたすほどに自己愛が強い人は対人関係におけるトラブルも顕在化しているといえる。例えば、日本において、主に Kohut の提唱する過敏型自己愛が強まることで、うつや引きこもりなどの不適応となることが問題であると考えられている（上地・宮下，2005）。このように、同じ自己愛という概念であっても、誇大型か過敏型かなどの表れ方の違いや、自己愛の強弱によって対人関係の方略や適応度が異なると考えられる。

上記のことを踏まえて本研究では、誇大型自己愛と過敏型自己愛の両者を測定し、自己愛の特徴によって、対人関係の方略に違いがあるのかを研究する。そのために、本研究では小塩（1998）の NPI-S と上地・宮下（2009）の NVS 短縮版のそれぞれが自己愛の典型的類型としての誇大型自己愛と過敏型自己愛を代表するものと考え、「NPI-S」と「NVS 短縮版」の両方を混合した尺度を用いて調査を行う。

1.2 対人葛藤方略について

対人関係に密接に関係している概念として、対人葛藤方略が挙げられる。これは、社会心理学において、葛藤当事者が葛藤を解決するために用いる行動という意味で用いられる概念である。対人葛藤および対人葛藤方略の定義は多くの先行研究でほぼ同様の定義づけがされている

ため、本研究でも加藤（2003）を参考に、対人葛藤の定義を「個人の行動、感情、思考の過程が他者によって妨害されている状態」とし、対人葛藤方略を「対人葛藤状況において、葛藤解決を目的とし、方略行使者が葛藤相手に対して何らかの影響力を行使しようとした行動」と定義する。

加藤（2003）は、対人葛藤方略での主要な研究領域として、葛藤方略の分類研究と方略選択に影響する要因研究に分けられるとしている。そして現在の葛藤方略の分類研究では、Blake & Mouton が方略行使者の関心事を満たす程度を示す「自己志向性」と、葛藤相手の関心事を満たす程度を示す「他者志向性」の2次元によって作成された2次元5スタイルモデルに分類して以降、2次元5スタイルモデルは多くの研究者によって支持されているとし、対人葛藤方略スタイル尺度（Handling Interpersonal Conflict Inventory ; HICI）を作成した。この尺度を用いて、「自己志向性」「他者志向性」どちらの志向性も高いものを「統合スタイル」、自己志向性が高く、他者志向性が低いものを「強制スタイル」、自己志向性が低く、他者志向性が高いものを「自己譲歩スタイル」、どちらの志向性も低いものを「回避スタイル」、どちらも中程度であるものを「相互妥協スタイル」とし、以上の5スタイルによって方略を捉えている。そして、加藤（2003）は、5つの方略の特徴について、以下のように述べている。

まず1つ目の「統合スタイル」は、方略行使者と葛藤相手の両者が受け入れられるように交渉し、問題を解決しようとする方略群である。2つ目の「強制スタイル」は、葛藤相手の利益を犠牲にしても、行使者の要求や意見を通そうとする方略群である。3つ目の「自己譲歩スタイル」は、葛藤相手の要求や意見に服従する方略群である。4つ目の「回避スタイル」は、直接的な葛藤を避けようとする方略群である。5つ目の「相互妥協スタイル」は、行使者と葛藤相手の両者が相互に要求や意見を譲歩し合い、お互いに受け入れられる結果を得ようとする方略群である。

もう一つの研究領域である方略選択に影響する要因研究では、対人葛藤方略は多数の要因によって影響されると考えられている。例えば、藤森（1989）は、葛藤の責任帰属や重要性などについての認知が、大淵・福島（1997）では、親密度、性別、地位などの相手との関係性が影響するとしている。また加藤（2003）は、Big Fiveをパーソナリティの指標とし、パーソナリティが各葛藤方略の選択に影響を及ぼしていることを実証している。

以上、どの方略スタイルをとりやすいかは葛藤状況や相手との関係性、パーソナリティ特性などの個人の特性が関係していると考えられる。

また、対人葛藤方略は精神的健康や対人関係など多数の要因に影響を与えているとも考えられる。加藤（2006）は、対人ストレスコーピング、対人葛藤方略と精神的健康との関連性を検討している。この研究によると、統合スタイル・相互妥協スタイルをとりやすい人は、精神的健康的にポジティブな結果となると考えられる。

小林（2011）は、就職活動中あるいは直前に控えている大学3・4年生の対人葛藤方略について研究し、自由回答の対人葛藤方略を上述の各方略に分類し、特徴を述べているとともに、各方略による男女差についても検討している。その結果、方略スタイルの「相互妥協」と「統

合」は分かちがたい概念であるとしている。そして、各方略と対人関係感性、ソーシャルスキルの選択や自己評価、会社適応への自信との関連について、まず「統合（相互妥協）」スタイルをとる人は、男性の場合、協調スキルが高く、周囲の人と上手くやっつけられるという自己評価が高いことを示唆した。また、女性では、積極的コミュニケーションスキルと仕事の遂行スキルが高く、相手と積極的にコミュニケーションが取れ、てきばきと物事をこなせるということが示唆された。次に「服従（自己譲歩）」スタイルは、男性の場合、協調スキルが有意に低かった。また、女性においては対人関係感性が有意に高く、積極的コミュニケーションスキル、協調スキル、トラブル処理スキル、会社適応への自信が有意に低く、ソーシャルスキルへの自己評価が低いことが示唆された。「回避」スタイルは男性の場合、対人関係感性が高いが、女性の場合は有意差が見られなかった。「支配（強制）」スタイルについても、男女ともに有意差はなしという結果であった。

以上の研究成果を踏まえ、本研究では、多くの先行研究のように1つの場面のみを提示するのではなく、家族や友人、恋人など、親しい立場の人との私的な場面での葛藤状況と、大学生の公的な場面の代表として、サークル活動での葛藤状況という、立場や責任の違う2つの場面を想定し、男女の大学生に対して2次元5スタイルモデルを測定するHICIを用いて調査を行う。

第2章 目的

第1章で述べたように、先行研究から青年期は自己愛傾向が強まり、自己愛傾向により対人関係の結び方や適応度が異なることが言われている。そして、自己愛は2種類に分類され、誇大型自己愛は適応的であり、過敏型自己愛は不適応的であるということが論じられている。さらに、対人葛藤方略が性別、場面等様々な要因に影響されると共に、精神的健康や対人関係に与える影響についても言及した。

そこで、本研究では自己愛傾向が強まるといわれている青年期にある大学生を対象として、自己愛と対人葛藤方略を分類し、その関連を調査する。その関連を調べることによって、自己愛の2つの類型が対人葛藤場面においてどのような方略をとりやすいのかを同定することを目的とした。また対人葛藤方略は葛藤を引き起こす場面や性別により異なることが明らかになっているため、公的場面と私的場面の2種類の葛藤場面を設定し、場面や性別の違いによって自己愛と対人葛藤方略のスタイルの違いがあるかを調べることにした。

この研究の進展は、自己愛が強い人が葛藤状況に置かれている際の臨床心理学的介入の指針の一助になるのではないかと考える。また、大学生の自己愛研究ならびに対人葛藤方略研究が進展するのではないかと考える。

第3章 研究方法

3.1 調査対象者

都内の大学に通う18歳から25歳までの学生。

3.2 調査期間

2014年5月から2014年10月まで。

3.3 手続き

本研究は桜美林大学の研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号13050）。

都内のA大学の講義を担当している教員に研究目的と倫理的配慮を文書・口頭にて説明した上で、承認を得られた教員の講義を受ける学生を対象とし、講義終了時に調査用紙を配布した。配布の際に、調査用紙への回答を放棄した場合も不利益は生じないこと等、調査の目的や倫理上の配慮に関する口頭説明を5分程度行った。質問には無記名で回答してもらった。調査用紙の回収は、翌週の講義終了後に教室の出入り口に回収箱を設置して行った。

3.4 調査用紙

調査用紙はフェイスシートと以下の2つの尺度から構成されている。

1) フェイスシート

青年期である18歳から25歳までを調査対象とするため、年齢と学年を尋ねた。また、性差を検討するため、性別の記入も求めた。そのため、フェイスシートでは、年齢、学年、性別の記入を求める構成となった。

2) 自己愛人格目録短縮版（Narcissistic Personality Inventory-Short Version ; NPI-S）と自己愛的脆弱性尺度短縮版（Narcissistic Vulnerability Scale ; NVS 短縮版）の2つを混合した尺度（自己愛混合尺度）。

NPI-Sは誇大型自己愛を測定する尺度で、小塩（1998）によって作成された。「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子によって構成されている。各因子10項目の計30項目からなり、5件法にて回答を求めた。

NVS短縮版は脆弱性自己愛を測定する尺度で、上地・宮下（2009）によって作成された。「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の4因子によって構成されている。各因子は5項目の計20項目からなり、5件法にて回答を求めた。

NPI-SとNVS短縮版の項目は共に5件法であり、自己愛の類型を分類しやすくするために、2つの尺度を混合し、1つの尺度として回答を求めることとした。その際、大きく意味は異ならないと考え、NVS短縮版の回答項目（よくある～全くない）をNPI-Sの回答項目（とてもよく当てはまる～全く当てはまらない）に合わせ、回答を求めた。

3) 対人葛藤方略スタイル尺度（Handling Interpersonal Conflict Inventory ; HICI）

対人葛藤場面における方略スタイルを測定する尺度で加藤（2003）により作成された。「統合スタイル」「回避スタイル」「強制スタイル」「自己譲歩スタイル」「相互妥協スタイル」の5因子によって構成されている。各因子4項目で計20項目からなり、4件法（よく当てはまる～当てはまらない）にて回答を求めた。

本研究では、上述のHICIに特定の場面設定を加えて改良した。そのため、各質問の「友人」

との設問を場面設定に合わせるため、「相手」として回答を求めた。

また、葛藤場面については、以下の2場面を設定し、それぞれに回答を求めた。

まず設定場面 A を私的場面とし、高比良 (1998) にある「家族、友人、恋人などに、自分の欠点を指摘された (または、注意された。)」とした。次に設定場面 B を公的場面とし、小林 (2011) にある「サークル活動での部費の使い道についての会議で、あなたは、先程発言した自分の意見に自信があります。しかし、仲間は全く違う意見を言います。」とした。

第4章 結果

4.1 分析対象者

大学生 750 名に調査用紙を配布し、回収されたものは 420 名分 (回収率 56.0%) であった。そのうち、欠損値があるものなどを除き、295 名の調査用紙を分析の対象とした (有効回答率 70.2%)。

分析対象者の内訳は、男性 121 名 (41.0%)、女性 174 名 (59.0%) であった。また、年齢の範囲は 18 歳から 24 歳までであり、平均年齢は 20.0 歳 \pm 1.3 であった。

4.2 自己愛混合尺度

4.2-1 因子分析の結果と信頼性、下位尺度間の相関

NPI-S と NVS 短縮版の 2 つを混合した尺度について、平均値と標準偏差を算出し得点分布を確認したところ、天井効果、フロア効果は見られなかったため、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

次に、全 50 項目を因子分析にかけ、因子構造の分析を行った (最尤法、プロマックス回転)。そして、固有値 .40 以上を基準として項目の取捨選択を行った。その結果、分散の説明率と内容の妥当性から 2 因子構造が適当であると判断された (累積寄与率 38.39%) (TABLE1)。第 1 因子は、多くの項目が NVS 短縮版から得られていて、少数の NPI-S の項目も「注目賞賛欲求」の他者からの評価を気にかけるとい項目であるため、先行研究に倣い、「過敏型自己愛」と命名した。第 2 因子はすべて NPI-S の誇大型項目から得られたため、これも先行研究に倣い、「誇大型自己愛」と命名した。得られた 2 つの因子の信頼性係数を求めたところ、「過敏型自己愛」は $\alpha = .92$ 、「誇大型自己愛」は $\alpha = .91$ と十分な値が得られた。そこで、2 因子構造「過敏型自己愛」因子 21 項目、「誇大型自己愛」因子 19 項目、計 40 項目からなる本尺度を自己愛混合尺度として分析に用いることとした。

なお、「過敏型自己愛」と「誇大型自己愛」との間の相関は低かった ($r = .17$)。

4.2-2 性別による下位尺度の比較

男女差の検定を行うために、自己愛尺度の下位尺度得点について t 検定を行った (TABLE 2)。その結果、過敏型自己愛因子については、男女の得点に有意な差はなかった ($t(293) = -1.55, n.s.$)。一方、誇大型自己愛因子について、女性より男性の方が有意に高い得点を示した ($t(293) = 2.59, p < .05$)。

TABLE 1. 自己愛混合尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転） N = 295

No	項目	元々の 尺度	因子	
			I	II
＜第1因子：過敏型自己愛＞				
49	自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたがない	NVS	.76	-.12
15	周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる	NPI	.69	.00
48	他の人から批判されると、そのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない	NVS	.68	-.21
42	まわりの人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある	NVS	.66	.11
34	他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が無視されているように感じるこ とがある	NVS	.65	.04
8	自分の良い所をほめられたり認められたいしないと、自分に自信がもてない	NVS	.64	-.04
43	相手が私を避けているように思えると、私は非常に落ち込んでしまう	NVS	.62	-.22
39	不安を感じているときには、だれかから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない	NVS	.61	-.02
30	人と話した後に「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある	NVS	.60	-.25
27	まわりの人に対して「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある	NVS	.59	.19
12	人が私に注意を向けてくれないと、落ちつかない気分になる	NPI	.59	.24
32	「自分のことを話しすぎた」と思って、自己嫌悪におちいることがある	NVS	.59	-.21
13	人前で自分のことを話したあとに、話した内容について後悔することがある	NVS	.59	-.27
17	私は、周囲の人がもっと私の能力を認めてくれたらいいのと思う	NVS	.59	.29
41	私は、みんなからほめられたいと思っている	NPI	.58	.17
16	他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで、後味の悪い感じが残ることがあ る	NVS	.58	-.14
28	つらいことや苦しいことがあるときには、身近な人にそれを理解してほしいと強く期待 する	NVS	.53	.08
18	他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので、腹が立つことがある	NVS	.50	.21
26	悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと、私は生きていけない と思う	NVS	.43	.07
24	まわりの人の態度を見ていて、こちらへの配慮が足りないと思うことがある	NVS	.43	.18
37	誰かと話しているときには、自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にし ている	NVS	.41	-.08
＜第2因子：誇大型自己愛＞				
45	私は、周りの人に影響を与えることができるような才能をもっている	NPI	-.09	.85
40	私は、周りの人たちよりも有能な人間であると思う	NPI	-.04	.76
20	私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	NPI	-.07	.73
1	私は、周りの人達より優れた才能を持っていると思う	NPI	-.10	.73
19	私は、才能に恵まれた人間であると思う	NPI	-.06	.73
38	私は、周りの人が学ぶだけの値打のある長所をもっている	NPI	-.02	.72
36	私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい	NPI	.16	.60
6	周りの人々は、私の才能を認めてくれる	NPI	-.18	.58
23	私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う	NPI	-.07	.58
7	私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	NPI	.19	.56
22	機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい	NPI	.23	.54
3	私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	NPI	-.10	.53
46	私は、人々の話題になるような人間になりたい	NPI	.32	.53
2	私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う	NPI	-.05	.52
9	私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	NPI	.04	.51
44	周りの人達が自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う	NPI	.10	.50
50	私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ	NPI	-.13	.48
47	私は、自分の意見をはっきりと言う人間だと思う	NPI	-.13	.44
29	いつも私は話しているうちに話の中心になってしまう	NPI	.12	.43
累積寄与率 (%)			38.39	
α 係数			.92	.91
因子相関			I	II
			I	-.17
			II	-

TABLE 2. 自己愛尺度の男女比較

	男性		女性		t 値
	平均	SD	平均	SD	
過敏型	3.10	0.67	3.22	0.65	-1.55
誇大型	2.92	0.71	2.72	0.60	2.59*

* $p < .05$

4.3 対人葛藤方略スタイル尺度

4.3-1 因子分析の結果と信頼性、下位尺度間の相関

本研究では、加藤（2003）によって作成された対人葛藤方略スタイル尺度（HICI）を用い、Aの私的場面、Bの公的場面それぞれに回答を求めた。まず、平均値と標準偏差を算出し、得点分布を確認したところ、どちらの場面でも、項目3「お互いの意見を水に流すよう主張する」でフロア効果が認められた。しかし、尺度の内容において必要であると判断したため、フロア効果が確認された項目3は除外せずに、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

次に、それぞれの場面、各20項目に対し、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その結果、分散の説明率と内容的妥当性から、両場面共に4因子構造が妥当であると考えられた。A場面・B場面の比較を行うために、両場面で重複した項目を使用し、再度因子分析を行った。その結果をTABLE3とTABLE4に示す。

A場面、B場面ともに、第1因子は、原尺度における「統合スタイル」と「相互妥協スタイル」が混ざった項目となったことから、「統合・相互妥協」と命名した。第2因子、第3因子、第4因子はそれぞれ、すべて原尺度における「強制」、「回避」、「自己譲歩」項目からなるため、先行研究に倣い、第2因子を「強制」、第3因子を「回避」、第4因子を「自己譲歩」とそれぞれ命名した。

そして、得られた4つの因子の信頼性係数を求めたところA場面の「統合・相互妥協」は $\alpha = .84$ 、「強制」は $\alpha = .86$ 、「回避」は $\alpha = .87$ 、「自己譲歩」は $\alpha = .76$ と十分な値が得られた。また、累積寄与率は58.26%であった（TABLE 3）。B場面も「統合・相互妥協」は $\alpha = .86$ 、「強制」は $\alpha = .85$ 、「回避」は $\alpha = .90$ 、「自己譲歩」は $\alpha = .82$ と十分な値が得られた。また、累積寄与率は61.79%であった（TABLE 4）。そこで、両場面とも4因子構造として、「統合・相互妥協」因子6項目、「強制」因子4項目、「回避」因子3項目、「自己譲歩」因子3項目の計16項目からなる本尺度を対人葛藤方略スタイル尺度として、以降の分析に用いることとした。

A場面での下位尺度間の相関の結果では、「回避」と「自己譲歩」の間に中等度の相関がみられた（ $r = .46$ ）。また、「統合・相互妥協」と「強制」（ $r = .27$ ）、「回避」（ $r = .29$ ）、「自己譲歩」（ $r = .25$ ）の間にそれぞれ弱い相関がみられた。

B場面での下位尺度間の相関の結果については、「統合・相互妥協」と「回避」の間（ $r = .36$ ）、「統合・相互妥協」と「自己譲歩」の間（ $r = .20$ ）、「強制」と「自己譲歩」の間（ $r = .22$ ）、「回避」と「自己譲歩」の間（ $r = .31$ ）に弱い相関がみられた。

TABLE 3. 対人葛藤方略スタイルA 場面尺度 因子分析の結果 (最尤法・プロマックス回転) N = 295

No	項目	因子			
		I	II	III	IV
<第1因子:統合・相互妥協>					
7	お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする	.84	-.09	.01	-.10
10	最良の結果が得られるように,お互いの考えを理解する	.81	-.06	.01	-.07
6	お互いの利益になるような決定をする	.72	-.01	-.09	.11
9	お互いの目的を支持する	.70	.08	.04	.07
15	お互いの意見の歩みよったところで,取り決めようとする	.56	.19	.08	-.01
1	お互いの意見の間を取ろうとする	.41	.06	.00	.12
<第2因子:強制>					
14	自分の立場を押し通そうとする	-.05	.87	-.03	-.01
20	自分の意見を通そうとする	.03	.82	.00	-.05
5	自分の意見を押し通すために,いろんなことをする	-.01	.72	-.12	.12
13	自分にとって有利な結果を得ようとする	.11	.70	.10	-.09
<第3因子:回避>					
16	相手との衝突を避けようとする	-.04	.04	.90	-.01
19	対立を防ごうとする	.00	-.06	.83	.03
11	できる限り口論にならないようにする	.09	-.05	.76	.01
<第4因子:自己譲歩>					
2	相手(家族,友人,恋人など)の要求に従う	.06	-.13	.01	.74
4	相手の目的に添うようにする	.14	-.03	-.09	.73
17	相手の望み通りにする	-.17	.15	.18	.65
累積寄与率 (%)					58.26
α 係数		.84	.86	.87	.76
因子相関		I	II	III	IV
		I	-.27	.29	.25
		II	-	-.05	.18
		III		-	.46
		IV			-

TABLE 4. 対人葛藤方略スタイルB 場面尺度 因子分析の結果 (最尤法・プロマックス回転) N = 295

No	項目	因子			
		I	II	III	IV
<第1因子:統合・相互妥協>					
7	お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする	.87	-.01	.00	-.14
6	お互いの利益になるような決定をする	.79	.06	-.06	-.03
9	お互いの目的を支持する	.74	-.06	-.04	.15
10	最良の結果が得られるように,お互いの考えを理解する	.74	-.10	.10	-.08
15	お互いの意見の歩みよったところで,取り決めようとする	.60	.11	.07	-.01
1	お互いの意見の間を取ろうとする	.51	.06	-.01	.26
<第2因子:強制>					
20	自分の意見を通そうとする	.01	.85	.07	-.04
14	自分の立場を押し通そうとする	-.03	.79	-.04	-.01
13	自分にとって有利な結果を得ようとする	-.02	.74	.07	-.04
5	自分の意見を押し通すために,いろんなことをする	.08	.70	-.13	.10
<第3因子:回避>					
11	できる限り口論にならないようにする	-.01	.00	.88	.05
19	対立を防ごうとする	.01	.01	.85	-.02
16	相手との衝突を避けようとする	.06	-.03	.83	.03
<第4因子:自己譲歩>					
2	相手(家族,友人,恋人など)の要求に従う	-.05	-.07	-.06	.98
4	相手の目的に添うようにする	.14	-.03	-.01	.70
17	相手の望み通りにする	-.12	.12	.15	.64
累積寄与率 (%)					61.79
α 係数		.86	.85	.90	.82
因子相関		I	II	III	IV
		I	-.18	.36	.20
		II	-	-.06	.22
		III		-	.31
		IV			-

4.3-2 男女差を含めた場面間での尺度の差

次に、性別と場面 A・B のそれぞれを独立変数とし、対人葛藤方略の 4 つのスタイルを従属変数として、2 要因の分散分析（混合計画）を行った（TABLE 5）。

TABLE 5. 性別と場面設定による各得点と分散分析結果

場面 性別	A 場面		B 場面		主効果		
	男性	女性	男性	女性	場面	性別	交互作用
統合・相互妥協	2.89	2.76	2.92	2.84	2.73	2.66	0.62
	0.60	0.60	0.61	0.61			
強制	2.19	1.99	2.30	2.03	4.87 *	8.79 **	1.18
	0.79	0.71	0.78	0.69			
回避	2.94	2.75	2.76	2.73	5.36 *	1.40	3.64
	0.81	0.89	0.91	0.87			
自己譲歩	2.60	2.29	2.34	2.07	31.84 ***	16.33 ***	0.23
	0.63	0.71	0.76	0.69			

上段：平均値，下段：標準偏差

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

統合・相互妥協スタイルでは、場面と性別における有意な交互作用はみられなかった ($F(1,293) = .62, n.s.$)。次いで場面と性別の主効果の検定を行ったところ、場面 ($F(1,293) = 2.73, n.s.$)、性別 ($F(1,293) = 2.66, n.s.$) ともに有意差は見られなかった。

強制スタイルでは、場面と性別における交互作用については、有意差は見られなかった ($F(1,293) = 1.18, n.s.$)。次いで場面と性別の主効果の検定を行ったところ、場面の主効果は、5%水準で有意差が見られ ($F(1,293) = 4.87, p < .05$)、B 場面が A 場面よりも値が大きかった。性別の主効果は、1%水準で有意差が見られ ($F(1,293) = 8.79, p < .01$)、男性が女性よりも値が大きかった。

回避スタイルでは、場面と性別における交互作用については、有意差は見られなかった ($F(1,293) = 3.64, n.s.$)。次いで場面と性別の主効果の検定を行ったところ、場面の主効果は、5%水準で有意差が見られ ($F(1,293) = 5.36, p < .05$)、A 場面が B 場面よりも値が大きかった。性別の主効果は有意差が見られなかった ($F(1,293) = 1.40, n.s.$)。

自己譲歩スタイルについては、場面と性別における交互作用については、有意差は見られなかった ($F(1,293) = .23, n.s.$)。次いで場面と性別の主効果の検定を行ったところ、場面の主効果は、0.1%水準で有意差が見られ ($F(1,293) = 31.84, p < .001$)、A 場面が B 場面よりも値が大きかった。性別の主効果は、0.1%で有意差が見られ ($F(1,293) = 16.33, p < .001$)、男性が女性よりも値が大きかった。

4.4 自己愛尺度と対人葛藤方略尺度間の相関

自己愛混合尺度と対人方略スタイル尺度間の関連を見るために、自己愛混合尺度の「誇大型」、

「過敏型」、対人葛藤方略スタイル尺度の「統合・相互妥協」、「強制」、「回避」、「自己譲歩」について、相関分析を行った。その際、前述した分析の結果により男女差があることが示されているため、相関分析は男女別に行った。

男性の結果を TABLE 6に、女性の結果を TABLE 7に示す。

TABLE 6. 自己愛尺度と対人葛藤方略スタイル尺度 男性の相関分析

	過敏型	誇大型	統合・相互妥協	強制	回避	自己譲歩
過敏型	—	.23 *	.23 *	.26 **	.31 **	.22 *
誇大型	.23 *	—	.27 **	.38 **	.04	.12
統合・相互妥協	.14	.23 *	—	.13	.34 **	.23 *
強制	.25 **	.32 **	.32 **	—	.05	.22 *
回避	.28 **	.01	.26 **	.00	—	.30 **
自己譲歩	.28 **	.14	.27 **	.11	.43 **	—

左下：A 場面，右上：B 場面

* $p < .05$, ** $p < .01$,

TABLE 7. 自己愛尺度と対人葛藤方略スタイル尺度 女性の相関分析

	過敏型	誇大型	統合・相互妥協	強制	回避	自己譲歩
過敏型	—	.14	.25 **	.14	.08	.00
誇大型	.14	—	.17 *	.39 **	-.02	.12
統合・相互妥協	.20 **	.25 **	—	.20 **	.35 **	.16 *
強制	.08	.38 **	.23 **	—	-.16 *	.11
回避	.09	.08	.26 **	-.15	—	.33 **
自己譲歩	.10	.07	.20 **	.10	.40 **	—

左下：A 場面，右上：B 場面

* $p < .05$, ** $p < .01$,

まず、男性 (TABLE 6) では、「誇大型」は、A 場面において「統合・相互妥協」($r = .23$, $p < .05$) と「強制」($r = .32$, $p < .01$) との間に弱い正の相関が示された。B 場面でも、「統合・相互妥協」($r = .27$, $p < .01$) と、「強制」($r = .38$, $p < .01$) との間に、それぞれに弱い正の相関が示された。次に「過敏型」は、A 場面において「強制」($r = .25$, $p < .01$)、「回避」($r = .28$, $p < .01$)、「自己譲歩」($r = .28$, $p < .01$) と、それぞれに弱い正の相関が示された。また B 場面では、「統合・相互妥協」($r = .23$, $p < .05$)、「強制」($r = .26$, $p < .01$)、「回避」($r = .31$, $p < .01$)、「自己譲歩」($r = .22$, $p < .05$) と、それぞれに弱い正の相関が示された。

次に、女性 (TABLE 7) では、「誇大型」は、A 場面において、「統合・相互妥協」($r = .25$, $p < .01$) および「強制」($r = .38$, $p < .01$) との間に、弱い正の相関が示された。また、B 場面においては、「強制」($r = .39$, $p < .01$) との間に弱い正の相関が示された。次に「過敏型」は A 場面において、「統合・相互妥協」($r = .20$, $p < .01$) との間に弱い正の相関が示された。また、

B 場面においても、「統合・相互妥協」($r = .25, p < .01$) との間に弱い正の相関が示された。

この結果をまとめると、誇大的自己愛が高い人は、男女とも私的・公的場面のいずれにおいても、強制スタイルを中心に用い、公的場面の女性以外はさらに統合・相互妥協スタイルも合わせて用いていることがわかる。

一方、過敏型自己愛が高い人は、男女で用いるスタイルや用い方がかなり異なっている。男性は私的場面では、統合・相互妥協スタイル以外を用いる傾向があるのに対して、公的場面では、多岐にわたるスタイルを用いる傾向があった。それに対して、女性は場面によるスタイルの違いはなく統合・相互妥協スタイルを用いる傾向があった。

第 5 章 考察

5.1 自己愛類型, 対人葛藤方略およびその関連について

本研究では、大学生における自己愛と対人葛藤方略を分類し、その関連を調べることによって、自己愛の 2 つの類型が対人葛藤場面においてどのような方略をとりやすいのかを同定することを目的とした。なお、葛藤場面は、公的場面と私的場面の 2 種類の場面を設定し、場面の違いや性別によって自己愛と対人葛藤方略のスタイルの違いがあるかを調べることにした。

今回の研究の成果として、第一に、自己愛混合尺度を用いた結果、自己愛類型が 2 つの類型として捉えられること、そしてその 2 つは相関が低くほとんど独立したものとして捉えられることがあげられる。

この結果は、自己愛を「過敏型自己愛」と「誇大型自己愛」に 2 分して考えた従来からの様々な研究の結果と合致していた。そして、過敏型自己愛と誇大型自己愛の 2 つの下位尺度間の相関がみられなかったことから、「過敏型自己愛」と「誇大型自己愛」は、同じ自己愛でも独立した概念であることが示唆された。しかしながら、2 つの因子の累積寄与率が 38% と低かったことから、本研究で用いた概念だけでは、自己愛について十分な説明ができないことが示唆された。そのため、今後項目の変更も含め、自己愛が十分説明できるような尺度を検討する必要があると考えられる。

第二に、対人葛藤方略については、従来の 5 スタイルモデルとほぼ同様の 4 スタイルモデルとして捉えられるが、そのスタイルの高低は葛藤場面や性別により異なることがあげられる。

加藤 (2003) の研究での類型のように、当初は「服従」「統合」「回避」「支配」「妥協」の 5 因子に分類できるとしていたが、因子分析の結果、本研究では A 場面・B 場面共に「統合・相互妥協」「強制」「回避」「自己譲歩」の 4 因子構造が妥当であると考えられた。加藤 (2003) の研究での HICI 作成過程においても、「統合スタイル」と「相互妥協スタイル」の相関係数が各葛藤方略スタイル間中で最も高い値を示しており、弁別妥当性の問題について触れている。また、森泉ら (2006) の研究にて、「妥当方略」と「統合方略」が非常に類似した特徴であったとしている。さらに、小林 (2011) の研究において「妥協スタイル」は、分類者によって判定が異なることが多く、その存在を認めながらも他の方略との明確な区別がなされず、他のスタイルに含まれる一手段として捉えるのが妥当であるとしている。そのため、本研究での 4 因

子構造という結果はこれらの先行研究と矛盾しない結果になったと考えられる。

対人葛藤方略の先行研究において性差を検討している研究は少ないが、性差を検討する必要があることは加藤（2003）や森泉ら（2006）が述べている。その中で性差を検討している研究として、小林（2011）の対人葛藤方略と対人関係感性やソーシャルスキルの自己評価、会社適応への自信との関連を調べた研究では、男性においては統合スタイルを使用し服従スタイルを使用しないことが協調スキルの高さに関連していることが明らかとなっている。また女性については、服従スタイルを使うものは対人関係の感性が高くソーシャルスキルや会社適応について自信がないことが明らかになっている。本研究の結果としては、対人葛藤方略における性差について、私的な場面と公的な場面のどちらにおいても、男性は女性よりも強制スタイルおよび自己譲歩スタイルをとりやすいことが示唆された。先行研究の結果からすると、男性が今回の設定されたような葛藤場面において、適応的であるとは言えない方略をとりやすいことがいえる。

次に、公私の葛藤場面の違いで葛藤方略スタイルが異なるのかを調べたところ、私的場面では公的場面と比べると自己譲歩スタイルを取りやすく、公的場面では逆に私的場面に比べて強制スタイルを取りやすいという結果となった。私的場面は、親しい人との間柄であるために、今後の関係性を維持していくことを意識して、相手と良い関係性を保とうとして譲歩するためではないかと考えられた。また逆に、公的場面では、私的場面よりも大勢の人に自己の意見を認めてもらいたいという心性が働き、自己の意見を主張する強制スタイルを選択するのではないかと考えられた。性差や場面差を検討している先行研究は少なく、今回の結果は新しい知見ではないかと考えられた。今後更なる検討が必要であると思われる。

第三に、自己愛類型と対人葛藤方略との関連については、性別や場面によって異なることが分かった。

誇大型自己愛が強い人は、私的場面・公的場面という場面設定や、男性・女性という性別に関係なく、強制スタイルをとりやすい点は従来の考え方を踏襲するものであるが、それに加えて女性の公的場面を除き統合・相互妥協スタイルも取りやすいという結果となった。

誇大型の特徴を持つ人の葛藤場面での振る舞いとして、自分の意見を主張した上で、相手との関係の中で自分の意見を押し進めるか、あるいは、相手との意見を調整するかの方略になるという結果になったといえる。そのため、対人関係において誇大型の特徴を持つ人は、相手の状態に合わせて自己の主張を実現させる可能性が高い傾向が考えられる一方で、加藤（2003）の強制スタイルは認知・行動的ストレス反応や孤独感が高く、友人関係に関する満足度が低いという結果から、強制スタイルをとることにより、対人関係がうまくいかず精神的健康を低めている可能性があるのではないかと考えられた。

次に、過敏型自己愛が強い人は、今回の調査では性別や場面によっても用いる方略が異なる結果となった。男性の場合はどちらの葛藤場面においても、強制スタイル・回避スタイル・自己譲歩スタイルと正の相関があり、公的場面のみ統合・相互妥協スタイルとも正の相関が見られた。このことから、特に親密な関係性において適応的な方略を選択できず、対人関係を築い

ていくことが苦手なのではないかと考えられた。加藤 (2003) は回避スタイル・強制スタイル・自己譲歩スタイルを用いることによって認知・行動的ストレス反応、孤独感、身体的ストレス反応が高くなることを示しており、公的な葛藤場面においては、統合・相互妥協スタイルとも有意な正の相関がある私的場面と比較すると適応的であるといえるが、いずれの場合も不適応的方略を取る可能性があると考えられる。女性の場合は、公的場面・私的場面ともに統合・相互妥協スタイルと正の相関が見られ、自分が他人からどう思われるかを気にすることが適応的な方略選択に結びついているのではないかと考えられた。過敏型自己愛に関しては、渡辺 (2011) の研究で述べられているような対人関係が希薄で回避的であるが一体性を求めるといふ特徴は、男性の場合は支持されたと考えられるが、女性の場合は支持されなかった。

5.2 臨床場面への応用

今回の研究では、誇大型自己愛が強い人は、葛藤場面におかれる場合、強制スタイルをとりやすいことが示唆されたため、女性の公的な場面以外では相関があった自分の意見も相手の意見も取り入れてまとめられるような統合・相互妥協スタイルを選択できるように支援することで、葛藤状況を和らげることが出来るのではないかと考えられる。

次に、過敏型自己愛が強い男性は、強制、回避、自己譲歩という不適応的な対人葛藤スタイルをとりやすいため、良好な関係が続かなくなる可能性が示唆された。そのため、過敏型自己愛が強い男性が葛藤状況におかれた場合は、アサーショントレーニングなどの訓練を通じて適切な自己表現ができるようにする等の介入を行い、より適応的な関係を維持していくことができるのではないかと考えられる。

5.3 今後の課題

本研究では、大学生を対象に自己愛と対人葛藤方略を分類し、その関連を調査した。その結果、先行研究では誇大型自己愛が強い人は適応的な、過敏型自己愛が強い人は不適応的な対人葛藤方略をとりやすいと考えられたが、誇大型自己愛が強い人は必ずしも適応的とは言いきれず、過敏型自己愛が強い人の場合も、男性の場合は不適応的であるが、女性の場合には不適応的な葛藤方略を用いるわけではないことがわかった。

課題としてまず、本研究では自己愛を測定する尺度として NPI-S と NVS 短縮版の 2 つの尺度を用いて、自己愛を誇大型と過敏型の 2 類型として捉えたことが挙げられる。今回の自己愛混合尺度においては、2 つの因子の累積寄与率が低く、今回測定された 2 要因以外の要因が自己愛の概念に含まれることが示唆された。そのため、今後の自己愛の研究においては尺度を見直す必要があると考えられる。

次に、今回は大学生の 18 歳から 25 歳までを対象としたが、年齢により発達課題は異なり、それに伴い自己愛の在り方が異なることも考えられるため、他の年齢層にも調査を行い、同様の結果が得られるかを確認することは必要と思われた。

最後に、今回の研究では、自己愛混合尺度と対人葛藤方略スタイル尺度との関連についての

み調査を行い、自己愛が適応的であるかについて考察を行ったが、ストレスや適応度についての他の尺度も合わせて用いることによって、より多角的に自己愛や対人葛藤方略についての意義や適応度に関する理解が深まるのではないかと考えられる。

文献

- 藤森立男 (1989). 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究. 社会心理学研究, 4 (2), 108-116.
- Gabbard, G. (1997). Transference and Countertransference in the Treatment of Narcissistic Patients. Ronningstam, E (Ed.). *Disorders of Narcissism — Diagnostic, Clinical, and Empirical Implication* —. Washington, DC: American Psychiatric Press Inc. 佐野信也 (監訳); 鈴木 豪 (訳) (2003). 自己愛患者の治療における転移と逆転移. 自己愛の障害—診断的, 臨床的, 経験的意義—. 金剛出版, pp.121-137.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2004). もろい青少年の心—自己愛の障害—発達臨床心理学的考察 北大路書房
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究, 14(1), 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性. パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 加藤 司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連性について. 社会心理学研究, 18(2), 78-88.
- 加藤 司 (2006). 対人ストレスコーピング, 対人葛藤方略と精神的健康との関連性—対人ストレスコーピング尺度の妥当性の検証—. 現代社会研究, 4, 3-9.
- 小林智美 (2011). 大学生の組織での対人葛藤方略について—ソーシャルスキル, 対人関係敏感性, 社会適応への自信との関連—. 桜美林大学 修士論文.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究—性役割観の関連—. 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 45, 45-53.
- 小塩真司・川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学: 概念・測定・パーソナリティ・対人関係. 金子書房 pp. 2-21.
- 森泉 哲・高井次郎 (2006). 対人コミュニケーション場面における自己主張性方略の規定因—対人関係と自我意識の観点から—. ヒューマン・コミュニケーション研究, 34, 95-117.
- 大淵憲一・福島 治 (1997). 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果—. 心理学研究, 68(3), 155-162.
- 渡辺直己 (2011). 自己愛類型別にみた大学生の対人関係および対人的価値観—自己愛の2側面の視点から—. 北星学園大学大学院論集, 2, 107-126.